高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

PipeLine

52
2018.12

Français

русскийязык

Português

English language

特集

分科会「外国語」「日本語・日本事情」

조선말, 한국어

Japanese &
Japanese affairs

中文,華語,漢語

Deutsch

español

No.52 Contents

特集 分科会「外国語」「日本語・日本事情」	P1~4
教養のページ 国際支援を体験して見えた国際看護	P5～6
FD部会報告 「よい授業」ってなに？	P7
共通教育実施委員会からのお知らせ 大学で教養を学ぶ意味	P8

特集 分科会「外国語」「日本語・日本事情」

「外国語」

共通教育では、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語そして韓国語（朝鮮語）の6つの外国語の授業が開講されています。このうち英語を除く5言語は、内々では「初習外国語」と呼ばれ、受講生にとっても、これまでのことは忘れて、新たな外国語を新たな気持ちで勉強しよう、そう思ったりすることもあるかもしれない科目です。一方英語は、過去6年程度の学習歴を少なくとも持っています。しかも、そのような「これまでのこと」とはほぼ無関係に、誰にでも初年次科目「大学英語入門」はやってきます。さらに昨今、小学校での教科化や入試改革をめぐる議論にみられるように「英語」は何かと矢面に立たされます。そういう次第で、外国語分科会として、英語担当教員を中心にここ20年ばかりほぼ手つかずだった「大学英語入門」の見直しの作業に入っています。そのことについて、英語担当の宗先生に文章を寄せてもらいました。なお、寄せてもらった文章は、今後の議論を活発化させるという意味合いも含んでいますので、ご意見がありましたらご遠慮なく寄せてください。

外国語分科会長　斎藤 昌人

「英語ができない理由を考えるところから始めてみる」という大学英語入門

人文社会科学部　宗　洋

「現代はグローバルな情報社会であるため、コミュニケーション英語の習得こそ急務。あるいは、4技能をバランスよく育成する」というのが、一般の方が抱く英語教育の改革のイメージだろう。ここで言われるコミュニケーション英語とは「話す能力」のことを指している。最近は海外からの留学生が増えてきており、彼らが日本語を流暢に話すのを聞き、「自分は英語が話せない」と落ち込む学生も多いはずだ。さらには大相撲のモンゴル人力士や歌番組に出演するK-POPアイドルがペラペラと日本語を話す姿をテレビで見かけることも多い。それに比べて日本人は英語が話せない…。そもそも日本人は言語能力が低いのだろうか？この素朴な疑問にこそ日本の英語教育の抱える認識のずれが潜んでいる。

モンゴル人力士やK-POPアイドルが日本語を巧みに操ることができる理由を言語学的に述べておくならば、彼らの言語と日本語の文法構造（主語・目的語・動詞の位置等）がほとんど同じだからである。朝鮮語に関して言えば、文法の90％超が日本語と共通しており、日常語以外の漢語を音読みにした語が日本語とほぼ同じである。

日本人が朝鮮語を話すには、無意識に使える日本語の文法のまま、漢字を若干調整して音読みにすればよい。韓国のアイドルが日本語をペラペラ喋ることができるのも同じ理由である。

それに対して日本語と英語は文法構造が全く異なる。簡単なところでも、日本語は「主語＋目的語＋動詞」の語順だが、英語は「主語＋動詞＋目的語」の語順になる。日本語の「君が探していた本」という文の構造は、「君が探していた」という連体修飾節が「本」という名詞を前方から修飾している。英語の “the book that you were looking for”という文では “that you were looking for”という関係詞節が “book”という名詞を後方から修飾している。日本語と英語では全く異なった文法の原理が働いている。つまり日本人が英語を理解するためには、母語の文法が役に立たない。言語学的見地から英語との言語距離を0～5段階に分類したElderとDaviesの研究によると以下のようになる。0ゲルマン諸語、1ロマンス諸語、2スラブ諸語、3アラビア語、中国語、インドネシア語、4ベトナム語、クメール語、5日本語、朝鮮語。日本語は英語と最も離れた言語なのである。英語とは方言レベルの差異しかないゲルマン諸語や母語の文法的な応用が即座に効くロマンス諸語の人々にとっての英文法の重みと日本人にとってのその重みは全く異なるものである。日本人にとっては、英語を読むときだけでなく、話すときにも、英文法を理解していないと意味の通じる文章を作れないわけだ。

発音面から言うと、日本語に母音は5つしかないが、英語には10数個～20数個（分析の仕方によって異なる）の母音がある。しかも人間の耳は、生後12カ月まではあらゆる言語の音素を聞き分けることができるが、12カ月を越えると母語以外の音素を聴き取れなくなる。これは母語を効率的に習得するためとされる。英語を聞き流すだけでよいとする学習法に根拠は無い。

こうしたことから必然的に言えることは、英語と日本語の言語差を無視した英語教育は、思いつき、思い込み、精神論、単なる理想論、酷いものは悪徳商法である。外国語環境にある日本語母語話者がこれだけ英語学習に不利な立場にあるという事実を考慮すると、英語を日常的に話す仕事に就く者は、ごくごく限られた数になる。会議を英語で行うというのは、非効率的であり、精神衛生上も宜しくない。ゆっくり考える時間がないため、“I couldn’t agree more.”という言葉の意味を取り違えたら、大変なことになる。英語での会議は専門のスタッフに任せるのが最も信頼できる。将来、会社で英語を使うとしたら、辞書を引きながらでもウェブサイトや仕様書や契約書を読んで理解できる英語力の養成というのが現実的だ。

発音に関しては、発音記号だけでなく、発音のルールを１年生のうちに学ぶべきである。例えば「単語の終わりが子音字なら、その前の母音字は単音」(例sat, fact, hymn, lynx)というルールがある。このルールを知っていると900語以上が発音記号なしで読める。また「母音字＋子音字＋eで単語が終わったら、その母音字は長音。最後のeは発音しない」(例late, time, lobe, type, dyke)というルールがあり、合計で1200語がそのまま読めるようになる。音節の最後に来るp, t, k, b, d, gはほとんど聞こえないことを予め知っていると、“Put back the cup.”や “next station”が「プッ バッ ザカッ」や「ネクス ステイション」にしか聞こえなくても、「よし！聞こえないぞ！そういうものなのだ」と納得できる。本来ならば英語音声学は教員免許状の必修科目とすべきものであるが、どういうわけかそうなっていない。１年生の段階でこうした基本を教えるべきである。教えずして、聞き流すだけで、英語が聞こえるようになるという主張は無責任だ。

現在検討中の改革案では、複数回かけて、英語と日本語の仕組みの違いを教室で学生と共有するメタ英語学習から入る。今まではこの共有がなかったため、学生と教員の双方がいら立ちを覚えていた。共通の土台に立ったうえで、文法、読解、発音に力を入れる授業を目指すべきだろう。授業改革というのは、流行りものに飛びつくのではいけない。現実、方法論、達成目標といったものを学問的に分析し、どのような学生を育てたいのかを説明する必要がある。大学英語入門が全員必修の授業であるならば、高知大学の教育の土台を提供する授業ともいえる。英語を専門とする教員が中身を考える。執行部には安定的な担当体制の構築を本気で考えて実施してもらう。それが改革の両輪である。

参考文献
Elder, C. and A. Davies. “Performance on ESL Examinations: Is There a Language Distance Effect?” Language and Education vol. 11. 1-17.
英語音声学研究会『大人の英語発音講座』NHK出版、2010
成田一『日本人に相応しい英語教育――文科行政に振り回されず生徒に責任を持とう』松柏社、2013
バトラー後藤裕子『英語学習は早いほど良いのか』岩波書店、2015

特集 分科会「外国語」「日本語・日本事情」

「日本語・日本事情」

日本語・日本事情分科会では、「日本の社会や文化に対する理解を深め、日本語の「話す・聞く・読む・書く」の4技能を磨き、自己表現能力の向上を目指す」という教育目標の下、外国人留学生及び外国において相当期間中等教育を受けた学生に対する「日本語」Ⅰ～Ⅳ、「日本事情」Ⅰ～Ⅳを開講しています。

ここでは、「日本語」科目から日本語Ⅲと日本語Ⅳを取り上げ、具体的な授業内容の紹介と「日本事情」科目での取り組みについて紹介していきます。

日本語・日本事情分科会長 国際地域連携センター　大塚 薫

「日本語」科目

＜日本語Ⅲ＞

「日本語Ⅲ」では、論理的な文章を書く力を養うとともに、自分の考え、意見を筋道立てて発表する能力の育成を目標に掲げています。レポートや論文を書く際に必要なアカデミックスキルを学ぶとともに、スピーチやディベートを実際に行い、相手の立場に立った論理的な意見の述べ方をピア活動を通して実践的に学習しています。

「日本語Ⅲ」を受講している留学生のみでなく、グループごとに日本人学生にサポートをしてもらい作文に対するピア・レビュー活動を行ったり、韓国や中国の協定校で日本語を専攻している学生とSkypeを通した遠隔授業で交流を持ち、相互に自己紹介をしたり、ディベートで対戦したり、一緒に講義を聞いた後その講義のテーマで討論したりと様々な活動を共有しながら自身の意見を発信していく力の育成を試みています。相手を意識した論理的な発信能力を育成したい留学生、日本人学生でも日本語教育の現場でどのような日本語が教えられているのか、留学生にどのように日本語を教えればよいのかに興味のある学生は、ぜひ授業に参加してもらえればと思います。

国際連携推進センター　大塚 薫

＜日本語Ⅳ＞

現在、留学生が卒業・修了後の進む先として、日本企業に就職したい、あるいは日本企業とやりとりする母国での起業を考えているという学生が多くいます。本学でも平成19年10月から平成24年3月まで経済産業省のアジア人財資金構想の一環で日本語Ⅳでもビジネス日本語を実施しました。社会人基礎力としての日本語教育という考え方です。

共通教育では時間数にも制限があり、そのエッセンスである日本語の世界での思考に力点を置き、授業を進めています。従来の日本語教育では自分の頭に浮かんだことを正確に表現することに重点を置いています。発信していくことが基本になります。

しかしさらに、発信したことがどういうことを引き起こすかが、社会に出たときには重要です。ここでは表現したことが相手にどう伝わるのか、伝えたいことをどう表現すると相手がこちらの伝えたいことを思い浮かべるのかという点に力点を置いています。できるだけ具体的な場面を設定しながら進めています。ですから、日本人の学生も出てくれればもっと幅のある授業になるかもしれません。そんな授業にしていきたいです。

国際連携推進センター　神﨑 道太郎

「日本事情」科目

＜日本事情Ⅲ・Ⅳ＞

「日本事情」では、移り変わる現代の日本と、変わらぬ日本の伝統の両面を伝え、日本にやってきた留学生がより深く日本を理解できるよう、様々な観点から日本について伝えることを心がけています。時事問題、教育問題、コミュニケーションにおける日本人の特徴、季節の行事や習慣、伝統文化の紹介など、なるべく日本にやってきた留学生にとって身近な話題を幅広く取り上げています。またこの授業を通して日本を知ると同時に、自国についても見つめ直すきっかけ作りができればと考えています。

「日本」を伝えるということはとても難しいことですが、担当者自身、毎年試行錯誤を繰り返しながら授業を行っています。「日本語」とともに、外国人留学生及び外国において教育を受けた学生のための科目であり、日本語を母語とする人は履修できませんが、授業の見学は歓迎ですので、興味がある人はぜひ担当者に問い合わせてみてください。

人文社会科学部　佐野 由紀子

教養のページ

国際支援を体験して見えた国際看護

医学部看護学科　下嶽 ユキ

看護基礎教育カリキュラム改正が2009年に行われ、今や「国際看護」がクローズアップされ、看護職にとって国際的視点は欠かせないものとなった。国際協力という言葉で表される活動や機関の様態はさまざまであるが幅広く目を向けて欲しいと願いながら、実際に体験した中で見えた国際看護について述べる。

私がタイの国際ドンムアン空港に初めて降り立ったのは1988年7月の蒸し暑い夏の真夜中であった（現在はスワンナプーム国際空港に移転している）。ホテルまでタクシーで向かう車中、タクシーの中で♪サバーイサバーイ♪という曲が流れていたのを憶えている。空港からしばらく続く凸凹道で、大きく揺れる度に様々な不安が胸を過ぎったが、タイ語の音楽は私の心を癒してくれた。

私は、インドシナ難民たちの最終の住処となったチョンブリ市のパナニコム村で1988年～1990の2年間ボランティア活動に参加した。このパナニコム難民キャンプには人口１万人、約23ヶ国のボランティア団体がそれぞれの技術を用いて活動していた。職業的技術支援にはタイプライター、縫製、第三国への準備として英会話、フランス語、そして病院、クリニック等他があった。入院施設を完備した病院には、バングラディシュ人、ミャンマー人、フィリピン人、タイ人、ドイツ人、シンガポール人、日本人等が従事していた。職種は主に医師、看護師、薬剤師である。

私の配属はminor　surgeryで6カ月、傷の消毒、小切開、縫合、注射などの医療活動に従事した。小切開は産後の授乳で乳腺炎を引き起こした若い産婦の化膿し破裂して腐敗したリンゴのようになった乳房の手当てだった。傷の洗浄をしていると真っ白な乳汁が浸でてきた。しかし血行状態は良好で回復は早かった。日中は比較的穏やかな傷の手当てなどをしていたが、夜勤では急患に対応する救急外来に変わり夜中～朝方までバタバタすることもあった。

次の配属先OPD（Out of Patient Dispensary）ではバイタルサインをチェックする事から始まった。基本に則って測定した数値からアセスメントして、緊急性があるときは医師へ報告して診察を依頼した。胸部症状のある患者には心電図をとり、血圧の高い患者は臥床させて15分後の測定を行い、また雨季には外来で待っている患者の特徴のある悪寒を見つけマラリアの診断につなげる事もあった。

2年目には母子保健センターに異動した。子供のスクリーニングは看護師が行っていた。難民キャンプ内では、子供の出生に関するリストを日本人の助産師が作成していた。家庭訪問をしながら住居環境や家族関係を見て回ることも多かった。

雨季に夜中のスコールが始まると、夜勤者にとって特に緊張する時間であった。必ずお産のケースが入り込み一夜で3件～5件の出産に立ち会う事が多かったからである。難民キャンプでは電気の供給が充分でないため停電が起きることが多々あった。スコールになると病院全体が真っ暗闇で出産時には懐中電灯を照らしながら分娩の進行を見守った。勿論一人の明かりでは不十分であった。ワーカー達は自家発電の持ち主に交渉して電気を持ってきてくれた。分娩が進行すると分娩進行Ⅰ期～Ⅳ期まですべて行った。薄暗い明りの中で側切開後の縫合は難儀であった。一晩にこの状態が続いている間は2件、3件と必死に母子の命と向き合いながら朝を迎えて行くのであった。やがて朝日が昇るのを眺めながら出産したばかりの母子を回り母親の穏やかな顔と赤ちゃんの寝顔でホッと一息がつけるのであった。ベトナム人の父親は女の子が産まれると沐

国際支援を体験して見えた国際看護

浴時にはビールを入れて欲しいと持参してくることがあった。そうすることで美人になるという言い伝えがあるらしい。

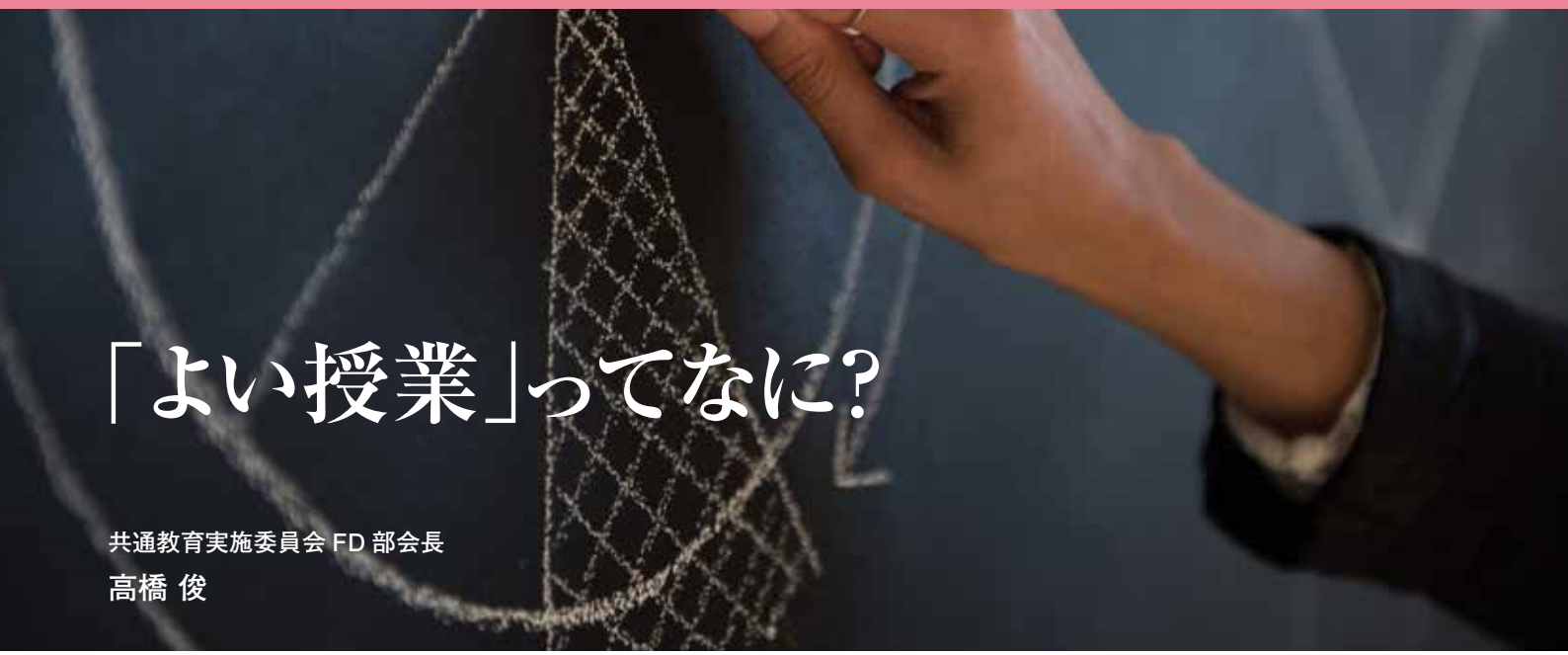
私はこの難民キャンプで海外の看護師たちと共に仕事をする経験をすることができた。主にタイ人看護師、アメリカ人看護師、ドイツ人看護師、フィリピン人看護師である。医療活動の際にも重要なのが医師や同僚、患者との言語による意思疎通である。難民キャンプの共通語は英語であった。赴任した3カ月は多国籍の言語が飛び交うなかで馴染めないこともあった。しかし学ぶ手段として診療録を集め医師の所見を書き写すことで、英語の医療用語、疾患に関連する所見の内容はそれぞれの医師のスペルが読みとれなくても推測ができるようになった。

国際色豊かな環境の中で、看護師の共通事項は看護過程の展開とSOAPの記載であった。アセスメントを読むことで其々の考え方を学び取ることができた。日本で学んだ看護教育が海外の地で生かせる素晴らしさを感じ取ることができた。

この難民キャンプでの経験を生かし、数年後には、タイのマヒドン大学大学院で公衆衛生学を学ぶチャンスを得た。アジア周辺の15カ国の医師を含む医療者と席を並べることで、それぞれの国が抱える医療問題を共有することができた。また日本の医療に関する注目度の高さに驚いた。特に介護保険が導入された後の変化に、高齢化社会を迎えるタイの国は関心を寄せていた。

その後の私は、積極的にモンゴルやカンボジアの海外医療活動への参加を始め、カンボジア医療活動を開始して以来2018年には9年目を迎える。現在このカンボジア医療活動からさらに国際保健分野での学びを始めているところである。

看護師の仕事がグローバルに拡大しつつあることを実感している。看護系大学で学ぶ日本の学生たちは、今後アジア周辺の看護を支えて行く宿命を担っていると思われる。そのためには4年間の学ぶ間にアジア周辺に赴くチャンスを組み立てて行く必要があるのではないかと感じている。アジア周辺の発展途上にある国の医療環境は私達日本人が想像もつかないような未開のところが多々見られる。アメリカやヨーロッパのような華やかさには欠けるが、美しい自然と我々と密接な歴史に刻まれたアジアはまだまだ魅力に絶えないところである。看護師は国際的に通じることができる素晴らしい仕事である。世界に目を向け一歩踏み出す勇気を持って学んで欲しいと望んでいる。



「よい授業」ってなに?

共通教育実施委員会 FD 部会長
高橋 俊

今年度より FD 部会長となりました、人文社会科学部の高橋俊と申します。中国文学を専門にしています。どうぞよろしくお願いいたします。

FD とはファカルティ・ディベロプメント（Faculty Development）のこと。すなわち「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」（文部科学省 HP より）です。HP によると、この定義が中央教育審議会の答申として出されたのが平成17年（2005 年）。これが日本に導入されて、まだ十数年といったところです。が、今ではすっかり定着しています。

実際に何をしているかというと、たとえば識者の講演を聞いたり、意見交換をしたり、あるいは教員がお互いの授業を参観し合ったり、と多岐にわたります。

小学校・中学校・高校と違い、大学教員になるには教員免許は必要ありません（私も持っていません）。それは、大学教員にはまず「研究力」が求められているからです。しかし大学教員には「教育力」は必要ないかというと、もちろんそんなことはありません。研究成果を的確に伝えるためのスキルも、研究者としての重要な要素です（授業だけでなく、学会発表や、論文執筆においても、この「他者に自分の研究成果をキチンと伝える」スキルは極めて重要です）。そしてそうしたスキルは、「自己流」では身につかない場合、あるいは自分自身では気づかない点も多いのです。私自身、他の先生の授業を見学するのは好きで、「いい点」「悪い点」それぞれにおいて参考になったことは数え切れないほどですし、また私の授業もできるだけ見学していただき、アドバイスをいただくことで、授業をよりよいものにするよう心がけています。

さて、「改善」と書きましたが、FD には「大学における「よい授業」とはどういうものか」を話し合う、という役割もあります。高校まででしたら、多くの場合、その定義は「生徒にテストでいい点を取らせる」となるでしょう。そして中学受験・高校受験・大学受験をより有利にする、というものです。

が、大学はどうでしょう？　就職活動においては、幸か不幸か、大学の成績は、今のところほとんど何も考慮されません（これに関して、企業は採用時に大学での成績を考慮すべきだ、という意見もありますが、私はやや反対です。その話はまたいずれ）。では大学における「よい授業」とはどういうものなのでしょうか。「わかりやすい授業」?「楽しい授業」?「考えさせる授業」?仮に「わかりやすい授業」と定義するとして、ある授業が「わかりやすい」かどうかはどう判断するのでしょう？　テスト？　アンケート？

どれも判断材料にはなりそうですが、決定的なものではなさそうです。

このように、「よい授業をするには」を議論するだけでなく、「そもそもよい授業とは？」という問題を考えていく、というのも、FD の重要なポイントです。そういった議論では、回答がキチンと出ることは、多くありません。参加者の考え方がバラバラ、ということも決して珍しくはなく、議論が白熱することも珍しくはありません。しかし、そういう議論の積み重ねこそが、大学での「よい授業」を作っていくのだと、私は考えています。

以前は、大学の授業はブラックボックスだといわれていました。教員免許も要らず、また小中高では盛んに行われている「研究授業」も、以前はほとんど行われませんでした。なので、「同じ内容で何十年も講義し続けている先生」「ほとんどしゃべらず、黒板に淡々と板書するだけの先生」「そもそも休講ばかりの先生」など、「都市伝説」は多く出回っています。

しかし今では、さすがにそういう先生はいませんし、またそういったことは許されなくなりました。授業評価アンケートも、今ではふつうに行われています。授業をよりよいものにするための取り組みを、われわれは日々行っているのです。

大学で教養を学ぶ意味

共通教育主管　近藤 康生

皆さんは、どのように教養科目を選択しているでしょうか？「講義題目が面白そうだから」、「シラバスを見て興味を持ったから」、等いろいろありそうです。教養科目は、興味のおもむくままに履修する、というのも悪くはありません。意外なところから新しい興味が湧く場合もあるし、それが後々思わぬところで役立つこともあるでしょう。しかし、教養に関わる情報は、ネットやテレビ、書籍・雑誌などにすでに世の中にあふれています。わざわざ大学で教養を学ぶ必要などないという考えすらあるかもしれません。

しかし、ネット時代の今も大学で教養科目をカリキュラムに組み込んでいるのは理由があります。お手軽に手に入る情報に対して、体系的な知識は、意識的・継続的に学ばないと身につきません。ひとりで意識的・継続的に学ぶこともちろん可能ですが、多くの人にとっては授業を聴き、友人と議論したり、教員に質問したりできる環境の中で学ぶ方がずっと効率的です。授業の中で、自分の考えの誤りや偏りに気づくことができるのもメリットです。大学の教養はこのためにあると言えます。

個別的・断片的な知識はあっという間に陳腐化しがちな上に、忘れるのも早いものです。卒業後、ふとしたことで思い出し、人生で真に役に立つ教養は、自分が苦労して学び、頭と身体に染みこんだもの、という気がします。実際のところ、教養と呼ぶべきものは、社会に出て、現実と格闘する中で少しずつ身につくものですが、そのための基礎を身につけるのが大学での教養と私は考えています。

このようなわけで、将来、専門を生かした仕事に就いた際、必要となる教養は何かを考え、計画的に教養科目を履修し、専門以外の1分野で体系的な知識を身につけておくことをお勧めします。教養科目の中で、関連のある科目を複数履修したり、授業に関連する本を自分で探して読んだりして、自分の頭の中に独自の体系を作るように努力すると、自分の血肉になります。大学卒業の時に、自分は学生時代に専門以外でこれを身につけた、と言える分野を一つ作ってはどうでしょうか。これまで「単位が取りやすそうだから」、「友人が履修しているからなんとなく」などという安易な理由で教養科目を選択した人がいたら、この際、考え直しませんか。

編集後記

アクティブラーニングの真髄って、結局はインプットした知識を自らアウトプット（活用）することにあると思います。脳科学的な見地からすると、アウトプットすることで、インプットだけの場合よりも、知識は遥かに脳に定着するそうです。インプット無きアウトプットは虚仮、アウトプット無きインプットは徒爾。教える側も教わる側もこのことを今一度銘記するべきだと感じるこの頃です。（Y）

高知大学共通教育広報誌 PipeLine〔パイプライン〕No.52
発　行 / 高知大学共通教育実施委員会
編　集 / 共通教育実施委員会広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168（学務課全学・共通教育係）
発行日 / 2018年12月
制　作 / ㈲西村謄写堂
□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail：gm06@kochi-u.ac.jp